

# インド

## GDP (2020年7-9月) 統計開始以来初の2期連続マイナス成長

### 1 実質GDP成長率と需要項目別内訳

### 2 産業別の粗付加価値

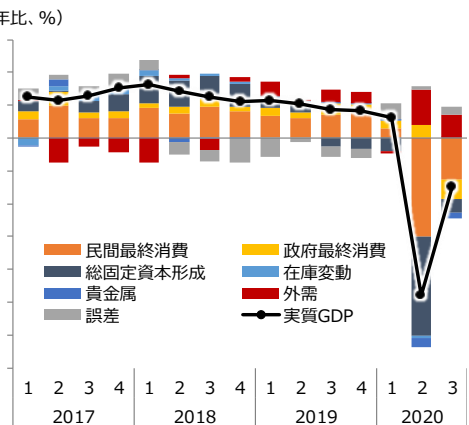
### 評価ポイント

#### 今回の結果

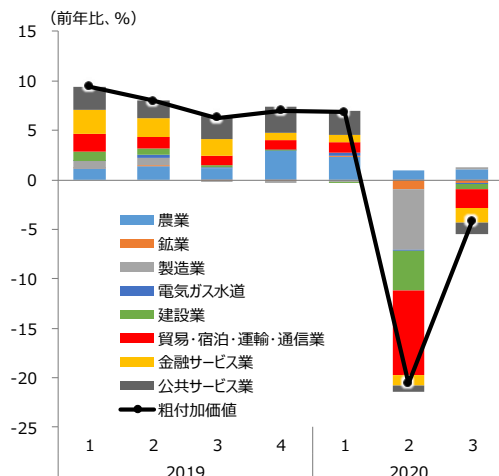
- 20年7-9月期のインド実質GDP成長率は前年同期比▲7.5%となった(図表1)。大幅なマイナスとなった4-6月期(▲23.9%)に続き、96年の四半期統計開始以来初となる2期連続での前年比マイナス成長となった。
- 需要項目別では、民間最終消費が同▲11.3%、総固定資本形成が同▲7.3%と2期連続のマイナスとなり、内需の低迷が続いている。政府最終消費も同▲22.2%と大幅なマイナスに転じた。輸出は同▲1.5%と小幅マイナスとなったものの、輸入が同▲17.2%と大幅に落ち込んだことで、外需の成長率への寄与度は同+3.4%ptとなった。
- 産業別の粗付加価値をみると、4-6月に大幅なマイナスとなった貿易・宿泊・運輸・通信業は同▲10.3%、同じく建設業が同▲8.4%とマイナスが続いている(図表2)。一方、製造業は同+1.7%となり、4-6月同▲39.3%からかろうじてプラス成長に転じた。

#### 基調判断と今後の流れ

- 新型コロナの感染拡大が続くインド経済は、経済活動の制限措置が長引いている影響から内需の低迷が続いており、景気後退局面に入った。
- 新規感染者数は11月末でも1日4万人を超え、累計感染者数は米国に次ぐ世界2位の930万人に達しており、経済活動への影響も長期化している(図表3)。小売・娯楽に関する外出行動はコロナ感染拡大前と比べて、足もとで30%前後、抑制されている。
- 一方、企業の生産活動を中心に少しずつ回復の兆しもみられている。10月の製造業PMIは58.9となり、17年11月の統計開始以来で最高値となった。9月の鉱工業生産指数は前年同月比+0.2%と、今年2月以来となるプラスに転じ、資本財生産も回復傾向にある。
- 10月の消費者物価は前年同月比+7.6%と前月からさらに加速した(図表4)。インド準備銀行がインフレ目標の上限として定める6%を上回って推移している。野菜価格(同+22.5%)や肉魚介類(同+18.7%)が大幅に上昇したほか、コロナによる物流停滞の影響等が背景にある。インド準備銀行は景気後退とインフレ率の高止まりというジレンマを抱え、積極的な金融緩和策を取りにくい状況にある。
- 20年度(20年4月~21年3月)の成長率は前年比▲8.9%と予測する。年次統計開始の1951年以降、四回目となるマイナス成長、かつ最大のマイナス幅となる公算。



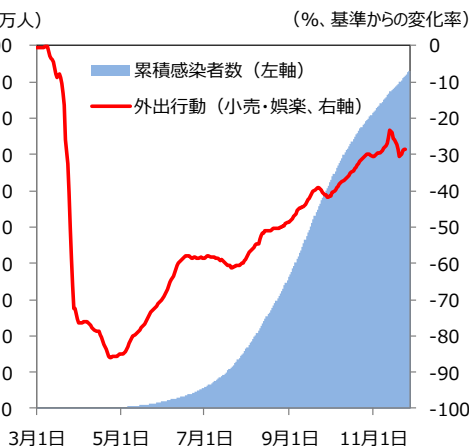
出所：CEICより三菱総合研究所作成



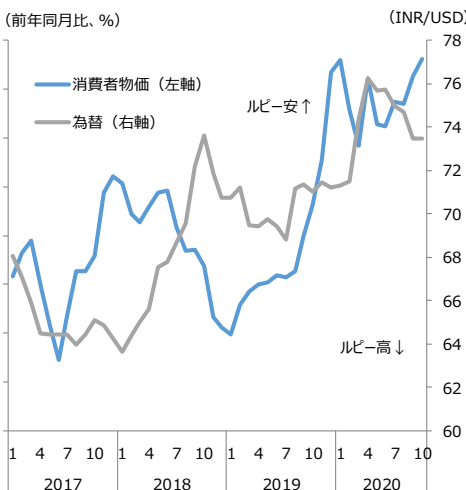
出所：CEICより三菱総合研究所作成

### 3 累積感染者数と外出行動

### 4 物価・為替動向



注1：累積感染者数の直近データは11月27日。  
注2：外出行動(小売・娯楽)は後方7日以降平均。直近は11月24日。  
出所：CEICより三菱総合研究所作成



出所：CEICより三菱総合研究所作成